

〈総括〉

試験時間 180分

総解答字数 89行

〔試験の外観〕

- ・例年通り、設問1・2の大問構成で、それぞれの「設問」が問1・問2に分かれており、解答紙は、A3用紙に罫線が16.3cm、行幅1.2cmであり、2,500～3,000字弱の論述が要求された。
- ・理系問題、文系問題ともに、ローカルに発生する社会問題の背後にグローバルな要素が含まれていたり、グローバルに影響を与えたりするという観点が含まれている。単にグローバル課題が出題されるというよりも、地球規模（グローバル）の課題を、地域（ローカル）に根ざして考察する力が求められている。
- ・例年通りグローバル（グローバルとローカルを合わせた造語）に発生する社会的問題に関する課題の設定と解決を、文系理系にまたがって学際的に追求するという、共創学部らしい出題であった。
- ・図表・図版、国が作成したパワーポイント資料を読解しながら問題を発見し、分析しながら問題解決を提案していくことが求められたという点も、例年通りだ。
- ・資料に文章も含まれるものの、分量は少なく、図表・図版資料が中心である。この傾向は定着したといっただろう。
- ・指定キーワードから選択して利用する等、過去の出題と同型式の出題がみられた。多様な出題形式の踏襲も、例年認められる傾向である。

〔特筆すべき事項〕

○文系問題

- ・文系問題では、事象の年次推移と政策を示した複数文章を関連づけながら、ひとまとまりの考察を行うことが求められた。特定の資料を別の資料の背景として位置づけることが求められており、個別に資料を読み取るだけでは対応できない出題であった。
- ・文系問題では、仮想のA市における対策を提案する問題も出題された。「コンセプトの設定」「対策の実現可能性」「コンセプトと対策の整合性」が明示されており、単なる思いつきの羅列は評価しないことが宣言されていた。資料と設問から現状の課題や原因・影響を分析した上で、対策のコンセプト・具体案を計画する力が高い水準で求められていることを十分自覚して対策を行う必要がある。九州大学共創学部が、具体的な問題解決の主体・場・方法を重視していることを理解しよう。
- ・以前は理系で仮想のA市での行政の対応が求められていた。文系理系を問わず、仮想の地域における具体的な対応策を求める問題が続いている。対策主体の属性（今年度は大学生）が特定されていることにも注意を払いつつ、十分な対策を行うべきだ。
- ・2025年度九大入試オープンでは、ダークツーリズムを2地域で具体的に計画する出題を行った。解説を利用して復習を行い、コンセプトの重要性や資料を利用した着想の仕方、具体的な論述ポイントを学習していた受験生にとっては、取り組みやすい課題であっただろう。

○理系問題

- ・理系問題は、資料や設問等を正確に理解することで、文系でも一定程度対応できるものであった。とはいえ、今年度は「アイデアで逃げ切る問題」は準備されていなかった。すなわち、基礎知識、理系的データの読み取り、前提条件とデータから導かれる推論の能力等、「科学的リテラシー」や「科学的視点」を幅広く持っていなければ、対応しづらい問題であった。
- ・とりわけ、図表リテラシーはきちんと身につけておかなければならない。加えて、非常に情報量が多い資料を前に、適切な考察を進めるために情報の取捨選択を行う力、複数の資料を付き合わせた際に浮上する課題を客観的に発見し記述する力、全体の問題を考察する上でノイズとなる情報を除去する力が不可欠だ。苦手とする受験生は、過去問を利用して、早急に対策を進める必要がある。
- ・なお、理系問題の解答字数は例年よりも少なかった。

○文理共通

- ・文系は科学的リテラシーを、理系は文系的視点に基づく分析力・記述力・論述力が不可欠である。文系の人でも理系の人でも、得意な方だけ解ければ良いといった甘い考えは捨てて、理系的視点を持ちながら社会的課題に興味を持ち、粘り強く考え、説得的に論述する力が、文系理系を問わず求められていることを心したい。
- ・出題形式は、毎年様々な工夫が施されている。一貫している学部のコンセプトを意識しながら学習することが重要だ。

- ・設問1、設問2ともに、近年大いに話題となった重要な社会問題からの出題である。
- ・時事問題に着目することも、大切な対策の1つである。

<課題文の分析>

大問番号	〔設問1〕〔設問2〕
内 容 (主題)	〔設問1〕日本の観光客動向とインバウンド観光の動向特徴および、観光による商店街の活性化プロジェクト 〔設問2〕炭素の循環と化石燃料形成の関連、地層への廃水注入と地震リスクおよび、二酸化炭素地下貯留施設設置の漏出しリスク
出 典	<p>〔設問1〕</p> <p>資料1<図>「年別 訪日外客数および出国日本人数の推移」 (出典) 日本政府観光局 (JNTO) 「日本の観光統計データ」を参考に作成</p> <p>資料2<文章>「我が国の国際観光政策」 (出典) 『昭和48年度(1973年度)運輸白書』より抜粋</p> <p>資料3<文章>「海外旅行倍増計画(テン・ミリオン計画)の推進」 (出典) 『平成2年度(1990年度)運輸白書』に基づく</p> <p>資料4<文章>平成18年(2006年)『観光立国推進基本法』「附則」</p> <p>資料5<文章>「オーバーツーリズムの未然防止・抑制に向けた対策パッケージ」 (出典) 令和5年(2023年)10月18日 観光立国推進閣僚会議決 より抜粋</p> <p>資料6<図>「2023年都道府県別訪問率ランキング」 (出典) 日本政府観光局 (JNTO) 「日本の観光統計データ」ただし21位以下は省略</p> <p>資料7<図>「外国人延べ宿泊者数の出身国および地域別シェア【全国、2023年】」 (出典) 国土交通省資料をもとに一部改変</p> <p>資料8<図>「訪日外国人旅行者が訪日前に期待していたこと」 (出典) 『令和6年度(2024年度)版 観光白書』</p> <p>資料9<図>「商店街側が考える、外国人観光客が不便に感じていること(複数回答)」 (出典) 『平成28年度(2016年度)商店街インバウンド実態調査』</p> <p>資料10<図>「今後の地方エリアへの訪問意向を高めるもの(観光コンテンツ)」 (出典) 『令和6年度(2024年度)版 観光白書』</p> <p>資料11<図>「外国人延べ宿泊者数の出身国および地域別シェア【九州、2023年】」 (出典) 国土交通省資料をもとに一部改変</p>
	<p>〔設問2〕</p> <p>資料1<文章>「化石燃料の形成過程」 出典なし</p> <p>資料2<図>「過去約5億年間における大気中のO₂(酸素、上図)およびCO₂(二酸化炭素、下図)含有量の変遷」 (出典) 西村編著, 2010. 『基礎地球科学』朝倉書店より引用、加筆。元データは、Berner and Canfield, 1989, <i>Amer. Jour. Sci.</i>とBerner, 1994, <i>Amer. Jour. Sci.</i>による。</p> <p>資料3<図>「過去6億年間における地球規模の炭素地下埋没量」 (出典) Berner, 2023, <i>Nature</i>による</p> <p>資料4<文章と図>「CCSとは?」「二酸化炭素を、長期間にわたり安定して貯留できる地層とは?」「CO₂地下貯留のイメージ図」 (図出典) 日本CCS調査株式会社『二酸化炭素貯留適地調査事業の概要』に加筆</p> <p>資料5<図>「アメリカ合衆国の中部および東部における稼働中の廃水注入用井戸と誘発地震に関連する廃水注入用井戸それぞれの分布」 (出典) Weingarten et al., 2015, <i>Science</i>に加筆修正</p> <p>資料6<図>「1973年から2014年までに発生したアメリカ合衆国の中部および東部で発生した廃水注入に関連した地震」</p>

小論文

出典	(出典) Weingarten et al., 2015, <i>Science</i> に加筆修正 資料7 <図> 「廃水注入用井戸の稼働状況と誘発地震の関係」 (出典) Weingarten et al., 2015, <i>Science</i> に加筆修正 資料8 <図> 「イタリアにおける居住人口密度と CO ₂ 漏出地点を示した地図」 (出典) イタリアの 2001 年国勢調査、イタリア統計局による地図を改変。Roberts et al., 2011, <i>PNAS</i> 資料9 <表> 「イタリアにおける CO ₂ 漏出による死亡リスクと、社会がさらされている他の危険や出来事との比較」 (出典) Roberts et al., 2011, <i>PNAS</i>
長短・ 難易等 前年比較	長短 (短い・ <u>やや短い</u> ・変化なし・やや長い・長い) 難易 (易化・ <u>やや易化</u> ・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析〔設問1〕>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答 字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)	
設問1	図表・ その他	学部系統的	観光に関する統計やその他の資料1から11を読み解き、以下の間に答える。 ※解答紙はA3サイズ、罫線が引かれている。				
			問1	分析・ 説明、 論述	観光客数の推移に関する統計や観光政策に関連する政府文書、その他の資料1から8の内容に関して(1)、(2)に解答する。	14行	(1) 日本の観光政策に関連して発出された政府文書(資料2～5)が出された社会的背景について、資料1から読み取れる観光客数の動向を資料2～5のうちに示された情報と関連付けながら、一連の文章のかたちで時系列に沿って説明する。その際、指定されたキーワードのうち3つ以上を用いる。
			11行			(2) 近年の日本におけるインバウンド観光についての資料6～8および資料1から読み取れる情報をもとに、日本のインバウンド観光の特徴について説明する。また資料4で示された『観光立国推進基本法』制定の目的が達成されているかどうかについて、自分の考えを述べる。	
問2	論述	25行	あなたは、JR博多駅および福岡空港から電車で60分ほど離れた地方都市、A市の駅前にある商店街で、商店街の運営と活性化のプロジェクトに携わることになった。あなたはこの街に生まれ育った大学生であり、家族はここで雑貨屋を営んでいるものとする。この商店街は1990年代初頭から衰退が進み、現在はおよそ40軒ある店舗のうち半数ほどが閉店している状態である。だがここ数年は福岡県のインバウンド観光の余波から、商店街を歩く外国人旅行者の姿をよく目にするようになった。ただし現在のところ商店街では特別なインバウンド対応を実施しておらず、資料9に示されるような一般的な課題があることもわかっている。あなたなら商店街を含めた地域の活性化				

					<p>のためにどのような施策を取るだろうか。<u>明確なコンセプトを設定したうえで、実現可能かつコンセプトと整合した一貫性のある計画を立てる。</u>資料 10 および資料 11 も参考にしながら、商店街の立地特性を考慮し、それぞれの施策のデメリットにも触れつつ記述する。なお商店街の近傍には海水浴場と眺望豊かな山、温泉地、および創建 1000 年と伝えられる古社があり、いずれもバスを利用すれば 15 分程度でアクセス可能である。</p>
--	--	--	--	--	--

<大問分析〔設問 2〕>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
設問 2	図表・その他	学部系統的	<p>大気中の CO₂ に関する統計その他の資料 1 から 9 を読み解き、以下の間に答える。 ※解答紙は A3 サイズ、罫線が引かれている。</p>			
			問 1	分析・説明、論述		<p>現代では、人為的な CO₂ 排出に起因する地球温暖化が社会問題になっている。この CO₂ の大部分は、石炭や石油などの化石燃料を地下から採掘し、それを燃焼させてエネルギーを獲得する際に放出されるものである。これを踏まえて (1)、(2) に解答する。</p>
					10 行	(1) 化石燃料の形成過程や地球史における大気中の O ₂ (酸素) および CO ₂ 分圧 (濃度と同義) と化石燃料を含む地層の形成年代を示した資料 1 ~ 3 の内容に基づき、大気中の CO ₂ 濃度変化と化石燃料の形成の関連性を説明する。
					4 行	(2) 前問で考察した地球の営みを参考に、大気中の CO ₂ を削減するための基本的な考え方を「炭素の循環」というキーワードを含めて 2 行程度で記述する。
			問 2	分析・説明、論述		<p>近年、大気中の CO₂ を抽出し、地下や海底に貯留することで、大気中の CO₂ を減少させ地球温暖化を緩和する試みがなされている。特に地下貯留は多くの国で検討・実証実験が進められている。地下貯留は、CO₂ を含む流体 (H₂O や CO₂ からなる液体および気体の混合物) を地層内に保持する方法 (資料 4) であるが、誘発地震や CO₂ 漏出などのリスクが指摘されている。これを踏まえて (1) (2) に解答する。</p>
					12 行	(1) CO ₂ の地下貯留に関連して誘発地震が起こる可能性が指摘されている。資料 5 ~ 7 は、アメリカ合衆国で実施された地層内に流体 (工業廃水) を注入したことによって誘発された地震に関連するデータである。CO ₂ の地下貯留に関しても、CO ₂ を含む流体を地層内に注入するために同様の現象が起こる可能性がある。資料 5 ~ 7 に基づき、地下に注入された流体と地震との関係を説明する。また CO ₂ 流体を注入することで誘発される

					地震の発生数を抑制するためにはどのような点に注意すればよいか、資料5～7に基づいて説明する。
				13行	(2)ある自治体でCO ₂ の地下貯留施設の設置が計画されることになったと仮定する。この施設の設置に関連して、発生の可能性のあるCO ₂ 漏出のリスクの評価を行う委員会が設置され、あなたはそのメンバーとなった。資料8および9はイタリアにおけるCO ₂ 漏出のリスク評価に関するデータである。これらのデータを参考にしつつ、事前にどのようなデータや情報を集めれば、CO ₂ 漏出が発生しうるか、あるいはCO ₂ 漏出が発生した時にどのような影響が生じそうか、などのリスクを評価できると考えるか、またその評価の結果に基づいてどんな提言を委員会に行うか、自分の考えを述べる。ただし、具体的なリスクの値を計算して議論する必要はない。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント〔設問1〕＞

問1

(1)日本の観光に関して、図に示されたアウトバウンド・インバウンドの時系列での推移と、観光政策を述べた政府の文書に関連づけ、文書が出された社会的背景を説明するよう求める出題である。まずは個々の資料を適切に読み取り、各々の資料から得られた情報を他の資料と関連づけて整理する。

資料1が示すのは、さまざまな要因により海外を訪れる日本人と日本を訪れる外国人の数が増減していることである。日本と世界の国や地域の状況が観光客の動向に表れているので、それを資料2～5より見出す作業を行っていく。1960年代半ば以降、日本が豊かになるにつれ日本人の海外旅行者は順調に増加したが、国際交流という視点では問題があったこと、一方2000年代まで海外からの訪日客はあまり増えず、政策的にインバウンド観光誘致が強化されたことなどが指摘できる。このような作業に際して、設問で与えられたキーワードが役に立つ。設問文では「3つ以上用いる」との条件が付されているが、実は資料中のキーワードを押さえれば各資料が出された当時刻が起きていたか、つまりその社会的背景を的確に捉えられるようになっている。解答の条件というよりは手がかりという側面が大きく、十分に活用したいところである。

なお、「一連の文章のかたち」とは、「箇条書きは不可」という意味である。入試の小論文では「箇条書きにせよ」と指示されている場合を除き、箇条書きにしてはいけないという原則もここで確認しておこう。

(2)資料から日本のインバウンド観光の特徴を指摘すると共に、(1)でも触れたインバウンド観光誘致を図る『観光立国推進基本法』制定の目的が達成されているかを述べる。この間でも資料1、資料6～8の計4点の資料を扱うよう指示されており、個々の資料が持つ情報をばらばらに挙げただけでは「特徴」を明確化できないことに留意したい。読み取れた情報を組み合わせ関連づけることで初めて見えてくるものを探る必要がある。

また、資料からは『観光立国推進基本法』の目的は達成されていないと結論づけることになるだろうが、それは問2の前提ともなる。観光振興は外貨獲得だけでなく、地域社会の活性化や日本固有の文化・歴史に対する理解を促すことなどを旨とするものとして、問2を考察していこう。

問2

架空の地方都市、A市を舞台として、寂れた駅前商店街を含む地域活性化のための施策を立案することを求める設問である。これは実社会の中で解決困難な問題にアプローチしていく「共創的課題解決力」の獲得を

目指す九州大学共創学部の教育方針と密接に結びつき、いかにも共創学部の小論文らしい出題であるといえよう。

設問文が非常に長く、解答に当たって念頭に置くべき条件が多数示されている。たとえば「商店街の立地特性を考慮する」については、「JR博多駅あるいは福岡空港から電車で60分」の駅前、海水浴場、眺望豊かな山、温泉地、古社など観光資源として活用可能な地域の資源までバスで15分程度といった設定をきちんと押さえておくことが必要となる。商店街、またそれが所在するA市の姿をなるべく具体的に思い描き、大学生の自分がその活性化にどのようにかかわっていくか、リアリティのある論述としていきたい。

なお、資料5にもあるように、インバウンド観光にはオーバーツーリズムなどの問題も伴うので、個人的にはインバウンド観光に良い印象を持ってないという人も、この設問ではインバウンド観光を契機とした町興しを軸に考察を進めなくてはならない。設問全体が明らかにその流れを期待したものであり、それを無視するべきではない。小論文では、設問の要求に対応できたかどうかが大きく評価に影響することをしっかりと理解して取り組みたい。

<答案作成上のポイント〔設問2〕>

地球温暖化問題への対策として、二酸化炭素を回収して地下へ貯留する技術（Carbon dioxide Capture and Storage: CCS）の効果やリスクを考察する設問である。問1では、大気中のCO₂が地下に埋没することで減少することを確認し、問2（1）ではCO₂を地下に貯留するリスクを、工業廃水の地下注入事例をもとに類推させる。（2）では、自然発生したCO₂の被害を踏まえて、総合的なリスクを考察させる内容となっている。答案を書く前に出題者の狙いを把握できれば答えやすいが、それに気づくことができなくても、どこへ誘導されていくのかを意識して答案を作成すると、後の問に取り組みやすくなる。共創学部の小論文では、前の問があとの問のヒントとなることが多いため、設問中の問はできそうなものから任意に解くのではなく、出題順に、しかも設問間の関連性を考えながら解くことを心がけたい（ただし、設問1と設問2はどちらから解いてもよい）。CCSや工業廃水の注入、CO₂漏出についての知識がなくても、資料を注意深く読み、設問の要求に一つ一つ答えていけば解くことができるだろう。

問1

（1）は資料2と3から大気中CO₂と炭素地下埋没量が逆向きに連動していることを読み取り、大気と地下の間で炭素が行き来している関係性を説明する。ここで求められているのは、炭素の地下埋没量ではなく化石燃料の形成との関連性なので、資料1も活用して炭素埋没量と化石燃料の関係性も示す必要がある。ただし、それだけでは文字数が余る。ポイントとなる数値を挙げたり、生物や地学の知識を説明に加えたりすることで、より説得力のある解答となる。

（2）は人間の活動によって大気に出ていった炭素を再び地中に戻すことで炭素の循環が起これ、大気中のCO₂を減少させられることを説明すればよい。さまざまな説明の仕方があるが、2行という指定では多くても70字程度しか書けない。（1）で考えた地下の炭素を考慮に入れ、炭素の循環というキーワードを入れて簡潔にまとめる必要がある。

問2

（1）は、資料によって何を考えさせようとしているのか、すぐにはわかりにくいが見切り発車で答案を書き始め、資料の読み取りを無策のまま書き連ねるといったことは避けたい。まずはすべての資料に目を通し、突破口となりそうな箇所を探そう。真っ先に目につくのは資料7（C）の上昇する折れ線グラフだろう。これにより、注入速度が速いと誘発地震に関連する井戸の割合が増えることがわかる。また（D）と合わせて考えると、地震を誘発する要因は注入量よりも注入速度であると推測できる。資料5と6からは何が読み取れるだろうか。解答例のような土地の特徴を踏まえた考察は知識がないと難しいが、資料5からはすべての注入用井戸が地震を誘発するわけではないことを読み取り、資料7との整合性を図ることが可能である。資料6からは、注水に関連しない地震がよく起きている場所にも、そうでない場所にも誘発地震井戸が存在することがわかる。前者に注目したのが解答例1で、後者が解答例2である。

（2）は、（1）の誘発地震から話題が変わり、CO₂漏出のリスクを考える問題だ。イタリアの地図が登場するが、これはイタリアが天然のCO₂漏出が激しい地域であることを利用して、人工的なCO₂貯留のリスクを考

えるために調査された研究の一例である。しかし、そういった事実は設問文には書かれていないため、受験生は、資料の説明を限なく読むことで必要な情報を得なければならない。たとえば資料8の下部には「このCO₂漏出は（中略）人工的なCO₂の地下貯留に関連するものではない」と書かれた説明がある。資料8を通して出題者が伝えたいのは、CO₂の漏出地点の多さに比べて、死亡事故が発生した地点が少ないということだろう。一方、資料9では、中毒死事故が起こるリスクは宝くじの大当たりよりも低いことが示されている。この間では、リスク評価を行うために必要な情報を資料4だけでなく、地球温暖化という大きな被害が確実に予想されるリスクの対策のために、CO₂漏出による中毒死事故のような稀に起こるリスクをどう扱うかという点も考慮に入れて、考察し記述する必要がある。このように資料を組み合わせることで、起きる確率が小さいから無視すればよいと述べるのではなく、解答例のように安全対策も同時に提案することで、より行き届いた提言になるだろう。

＜学習対策＞

- ・昨年度までと同様、質・量ともに備わった本格的な小論文問題である。学部の教育理念や研究内容に沿った出題も例年通りである。設問1、設問2ともに現代的、時事的なテーマが取りあげられることが多い点も知っておきたい。日本国内の課題がテーマとなることが多いが、その背景にグローバルな課題や、地球規模で起きている変化が関係していることがほとんどである。また、取りあげたテーマは、文理融合の形で出題される。こうした入試の特徴に対応するには、十分な準備が必須である。
- ・小論文は一般に、知識・技能に加え思考力・判断力、表現力等も測ろうとするものであるが、九州大学共創学部では特に「課題を発見し、解決するための思考力」が評価される。複数ある資料からわかる現実を的確に把握する力、それらを結びつけて課題を見出す力、見出した課題について自分なりに具体的、現実的な解決策を構想する力が求められる。
- ・まずは、設問文の細かな要求や、文章資料の内容を正確に読み取り、理解する力を身につけよう。設問を細かく分析する練習、多様な文章資料に触れ、正確に読解する練習が必要となる。また、資料で頻繁に登場する統計データや図表・グラフを的確に読み取り、分析し、利用できる能力も身につけておきたい。様々な図表・グラフに触れ、その内容を読み取る練習を行いたい。図表やグラフの大まかな特徴を捉えるだけでなく、丁寧に数値を確認する、複数のグラフを比較対照する、グラフから読み取れる現実とその背景を推論する、といった作業にも慣れておこう。これらの能力は基本的に小論文の問題、共創学部の過去問を通じて身につけるものであるが、小論文以外の教科で出題される図表やグラフの問題も良い練習の機会となる。たとえば九州大学入試の「地理総合」では、図表やグラフを分析する問題がよく出題されている。
- ・資料を基に課題を見出し、解決策を構想する際に、理系的な技術重視の視点、文系的な社会的対応を軸とする視点の双方が必要となる。これを身につけるには時間がかかる。日頃から日本の、また世界の様々な時事的な問題に関心を持ち、わからないことは納得いくまで調べることが出発点になるだろう。ただし、単に時事問題を知識として詰め込むだけでは不十分である。社会の様々な問題と、その原因や背景を知ったうえで、課題解決のために何が必要かを自分で考え、実際にどんな取り組みが行われているかを調べてもらいたい。この時に、科学技術を用いた解決策、公共政策や社会制度による解決策の両方を考え、調査しよう。
- ・「課題を発見し、解決するための思考力」を磨くことに加え、「表現力」を磨くことにも力を入れてもらいたい。様々な課題に対応する方法や解決策を、社会で実現していくには、社会を構成する多様な組織・個人との合意や協力・連携が必要となる。そのためには多様な利害や価値観を持った人に、わかりやすい形で自分の考え・構想を伝え、合意や協力をとりつける力ー表現力ーが求められる。自分の書く答案の「内容」に加え、「伝え方、説明の仕方」を振り返り、改善する練習を積んでおこう。答案の構成も事前に計画してから書くようにしたい。共創学部入試のように、複数の資料が出題される場合、論述の際に根拠とした資料を明示するといった論文の基本的作法も守る必要がある。過去問の解答例などで適切な答え方を学ぼう。
- ・選択される資料の種類や、設問で規定される解答作成上の条件などは毎年工夫して調整されており、解答作成はよくある定型的な「小論文の書き方」でこなせるものではない。とはいえ、まずは小論文の「基礎」を固めるところから練習をスタートしよう。資料の数が少ない、易しい小論文問題を解き、指導者による適切な添削指導を受けて繰り返し書き直すとよい。設問と資料の関連づけなど小論文の基本姿勢をこの段階で身につけよう。近年は、小論文以外でも入試で記述問題を課す教科が増えているが、こうした問題を解くことも、小論文の「基礎」を固める上では役に立つ。たとえば、九州大学の「歴史総合」入試で出題される

記述問題は、設問要求に対応しつつ、論理的な説明を行う力を身につける機会として活用できるだろう。

- ・「基礎」がある程度固まったら、過去問演習に移る。過去問を解いて添削を受け、書き直しを繰り返す。過去問は学部設置以降の問題すべてに取り組むことを推奨する。その過程で、インターネット等を利用して情報を収集し、書くネタや問題解決策を提言するコツもつかんでいくとよい。過去問を解く時、情報収集を行う時に、扱われているテーマや内容が、共創学部のどんな「エリア」や研究内容と結び付くかを考える習慣を身につけるとよい。九州大学共創学部の「エリア」や研究内容を知る上で、学部のホームページやパンフレットは、有力な情報源となる。特にホームページは大学入学後のカリキュラム、教員が研究しているテーマ、教員による講義動画などを見ることができる。これらを通じて、共創学部の特徴や学部で学ぶ分野などを理解しておこう。